

Story

エルフの宝石と謳われ称される美しき王妃アイシャ。二人の娘がいるとは信じられないほど若々しく清楚な人妻に魔の手が迫る。

「王のためにさらに美しさに磨きをかけませんか？」夫であるレオン王不在の隙を狙って人間族の魔術師が甘い言葉で王妃を誑かす。

幼い頃に一目見たエルフ王妃に心奪われた男の半生を賭けた罠に、ドレスに包まれた女体が震え、悶え、穢される。

「やめなさい、無礼者っ……ああ、やめて、耳は、耳はイヤ……！」

気丈に抵抗するアイシャだったが、魔術により全身を敏感にされ、子宮を闕られ、夫からは与えられなかった牝の悦びに堕とされていく。

「ダメ、こんなのダメ……あの人と違いすぎる……っ」一ヶ月に及ぶ人妻調教の末に王妃が選んだのは愛する夫か、それとも……。

アイシャ
奪われた
エルフ
王妃

青橋由高
安藤智也
illustration



「アイシヤ

奪われたエル

フ王妃」

青橋由高
あおはしゆたか

安藤智也
あんどともや

（著）

（イラスト）

三十五年前	4
前夜	6
三日目	21
四日目	28
十日目	32
十七日目	95
二十三日目	135
三十一日目	139
五十六日目	178
あとがき	182
電子版あとがき	185

三十五年前

それはまだ人間族がエルフ族との交流を開始して間もなかった頃。

それはまだ彼が幼く、恋を知る前のこと。

それはまだ彼女が未婚で、王女であったとき。

「おお、なんと美しいお姫様だ。お前もごらん、ギユネイ」

祖父に肩車をされた彼、ギユネイが見たのは、純白のドレスを纏ったエルフ族のプリンセスの優雅な微笑みだった。

「……………」

国交が結ばれたばかりの人間族との関係をよくするために各地を回っていた王族の一人、アイシャ王女の美しさに、当時八歳だったギユネイは一瞬にして心を奪われた。

人間族よりも細身で手脚が長く、透き通るような白い肌をした異種族の美少女に、ギユネイは生まれて初めての情動に襲われたのだ。

馬車の上から沿道に集まった村人たちに丁寧に手を振り、笑顔を振りまくエルフの王女の姿は、ギユネイのその後の人生を大きく変える。彼女自身の運命すら

も。

（もう一度あの人に会いたい……！）

その夢が叶うのはそれから三十五年後のこととなる。
このときの少年の想いとは異なる形をもって。

しかし、長い年月が歪めてしまうその想いは、この
ときはまだ純粹無垢な輝きを持っていた。

（アイシヤ様……いつかまた会いに行くよ）

前夜

「僭越ながら、私はレオン王御自らが陣頭指揮に当たられることを進言いたします」

会議室に声を響かせたのは、背は低く、けれども鍛え上げられた筋肉の鎧を纏ったスキンヘッドの男だった。

「なにを言うのだ、軍師ギユネイ」

「王の身を危険に晒せるものか」

「これだから人間の、しかも魔術師などという者は信用ならん！」

繊細な彫刻を施された巨大な机を叩く音と自らへの批判の声を、しかし、ギユネイは涼しい顔で聞き流していた。

（まったく、こいつらは長生きする分、学習する速度が遅すぎますね。あなた方のような寿命があれば、私はどれだけのことを成せたか……！）

四十代半ばとなった人間族のギユネイからすると、己の何倍もの寿命を持つ彼ら、エルフ族が妬ましくてたまらない。

（もっとも、だからこそ私のような人間でもこいつらに取り入れることができるのですから、これは感謝すべ

きところなのかもしれません）

数百年前の種族間戦争ののち、現在の世界では大きな争いは起きていない。異種族同士の交流がゆっくりではあるが進み、一部の好戦的な国を除いては、概ね世界は平和だ。

しかし、元々排他的かつプライドの高いエルフ族はいまだにギュネイのような人間をしばしば見下す。たとえギュネイがエルフ王国の王であるレオン直属の軍師であり、かつての戦友・友人であったとしても、である。

「待て、まだギュネイはなにも説明してないではないか。意見をぶつけるのは真意を聞いてからでも遅くはないだろう？」

ギュネイへのバッシングを制したのは、国王であるレオンだった。ギュネイの数倍は生きているというのに、見た目はギュネイよりも若い。

エルフ族らしく手脚が長く、身長も高い。もちろん、彼らの最大の特徴である耳は細く長い。

肌は白く、腰まで伸びた金髪はそれこそ乙女のようにだ。同じ男であるギュネイでも、ときどき見惚れてしまふほどの美男子だった。

「ギュネイ、どうして私に軍の先頭に立てと言うのだ？」

「我が軍が次に滅ばさなければならぬのはあのリザードマンたちです」

「ああ、できれば戦いたくないが、すでにあの連中に少なくとも同胞が命を奪われている」

経済や資源に恵まれている一方であり戦うことを好まないエルフ王国は、好戦的な種族たちにとって格好の獲物に映るらしい。国レベルでの争いではないものの、決して見逃せない脅威だった。

「みなさんもご存じのとおり、リザードマンの身体は硬い鱗で覆われ、我らの主要な武器である弓矢を弾きます」

「だが、お前が作ってくれた魔法の矢ならばあいつらの鱗を破れるのだろうか？ あの手腕の威力は、すでに実戦で証明済みだ」

「はい。しかし、それでも通常よりも近い距離で矢を放たなければなりません。リザードマンの動きは遅いため、我が国が誇る精鋭部隊の射程距離ならば、矢を射たのち、余裕を持って撤退できるでしょう」

「ならば、なぜお前は私に戦場に出ろと言う？ いや、私としてはまったく異論はないのだがな。たまには実戦に出ないと腕がなまる」

そう言ってレオンが笑ったのは、それだけの自信があるからだ。

実際、レオンの弓の腕は相当なものだし、この王の支持率の高さは、かつて国の危機に先頭に立って戦った勇姿によるところが大きい。

そしてそのときにエルフの英雄の仲間として戦ったのが当時まだ若かったギュネイだ。その縁で、こうしてギュネイは他種族でありながらも重職に就くことを許されている。

「なにを言いますかレオン王！」

「あなたにもしものことがあれば我が国はどうなると思います！」

「そんな怪しげな男の戯れ言など無視するべきです、レオン様！」

側近たちをどこか疎ましげに手で制しながら、レオンはギュネイに先を促す。

「リザードマンの容姿はおどましいものがございます。王のように実戦経験が豊富で勇敢な方であればなにも問題はないでしょう。しかし、我が軍にはまだ若い兵士も多いのです」

「なるほど、いくら頭では追いつかれないとわかっていても、あいつらの見た目の恐ろしさに経験の浅い兵たちが弓を外すかもしれん、というわけか」

「もちろん、これはあくまでも最悪の事態を想定してのことです。我が軍の精鋭たちは私ごときの浅

薄な懸念など吹き飛ばす活躍を見せる可能性が高いと思われます」

うるさい連中に文句を言われる前に、ギュネイはあらかじめ釘を刺しておく。

「ですから、レオン王が危険を冒して軍に同行する必要がどれほどあるのか、と尋ねられた場合、私は絶対に、とは申しません。あくまでも確率を上げる道を探るのが私の、軍師としての役目だとお考えください」

「私としては久々の実戦に心が騒ぐのだが……心配性のこの者たちを納得させられる案がお前にはあるのだろう、ギュネイ」

レオンはにやりと笑い、かつての仲間であり、現在は腹心である人間の顔を見る。

「王の慧眼には敬服いたします。……実は、先日開発をお伝えしていた防具が完成したのです。これがあればたとえあの凶悪なドラコンのブレスであっても、一度や二度は跳ね返します」

ギュネイの言葉に、会議室の全員が「おお」と声を上げた。

ここにいる連中は人間であるギュネイを好ましく思っていない反面、魔術師としての、軍師としてのギュネイの能力はしっかりと認めているのだ。

無論、ギュネイがそれだけの結果をずっと積み上げ

てきたからこそ、だ。

（勝ちましたね）

己の計画の第一歩が無事に踏み出されたことを確信し、ギユネイは心の中でほくそ笑む。

リザードマンたちの掃討部隊の陣頭指揮をレオン王が執ることが決まったのは、このわずか十分後のことだった。

リザードマン討伐軍の出立前夜、レオンの妻である王妃アイシャは愛しい夫に不安げな表情を向けていた。「本当にあなたが行かれるんですの？」

月の輝きよりも眩しいと称される銀髪を腰まで伸ばしたエルフの王妃は、寝室の窓から夜空を眺めていた夫の隣に寄り添う。残念ながら月も星も黒い雲に隠されていった。

「ああ、いつも兵士に命令だけして、自分が安全な城の中でこのうとふんぞり返ってるわけにもいかんからな」

「しかし、だからって王が自ら最前線に立つたなんて危険過ぎますわ」

細いが鍛えられたレオンの腕にしがみつき、愛する男の体温を頬で感じる。

「ははは、言っただろう、私にはギユネイが作ってくれた特製のアーマーがあると。万が一リザードマンどもに斬りかかれても、魔法の壁が私を守ってくれる。案ずるな」

妻の不安を解消しようとしてるのだろう、レオンはことさらに明るい声を出す。

「私、あの人間が信じられないのです」

「またか。お前はよほどギユネイのことが嫌いなのだな」

「嫌い、というわけでは……」

「よい、私たちエルフにとって他種族、特に人間の魔術師を信用するというのはそう容易いことでないのは理解できる。なにしろ私自身もかつてはそうだったからな」

おいで、とレオンは優しくアイシャの肩を抱き寄せ、豪奢なベッドへと妻を座らせた。沈み込むような柔らかい寝具に並んで腰かけ、エルフ王は美しく貞節な妻の額にキスをする。

「キミがギユネイを無理に信頼する必要はない。私と違い、アイシャはギユネイとともに戦った経験がないのだからな。ただ、彼の魔術と知識と知恵は信用してやってくれ。ギユネイのおかげで兵の犠牲が飛躍的に減ったのは事実だろう？」

「ええ。ギュネイの魔術は本物です。それは私も承知してますけど」

髪と同じ銀色の眉を寄せつつも、アイシャは渋々同意する。

（確かにあの人間の魔術は凄いわ。それは私自身の目で確認しているし）

かつて冒険者としてともに旅した戦友ギュネイを、レオンは心から信頼してるようにアイシャには見えた。何年前か、二人の娘が謎の病魔に襲われた際、レオンが真っ先に頼ったのもギュネイだった。

高熱にうなされ、苦しむ最愛の娘たちを魔術で治す姿をアイシャも目の前で見ている。しかし、アイシャがギュネイに本能的な不安を感じるようになったのもこの瞬間からだった。

（ギュネイが私や娘たちを見るときの目が、なんだか怖い……）

他の国々でも噂されるほどの美貌を買われ、若い頃は友好使節としてあちこちを回った経験がアイシャにはあった。

輝かんばかりの銀髪、白よりも白い肌、エメラルドのような瞳はエルフの至宝とも称された。

その神々しいまでの整った容姿に加え、隠しきれない女体の豊満さは訪問したあちこちで男たちの好奇の

目を集めた。

己の外見が異性の欲望を煽るものだとはい頃から知っていたし、慣れてしまえばいくらでもあしらえるのだが、ギュネイから感じるまなざしはそれらとは明らかに違っていた。

（あの男が私や娘たちに注ぐ視線は、そんな生易しいものではなかったわ）

王妃となつてからもアイシャは己に注がれる男の視線を感じる。むしろ人妻となり、二人の子を産んで成熟した今のほうがより生々しい牡の感情を集めてしまう。

その中でも、ギュネイから感じる視線は特別だった。ただの肉欲では説明できない、なにかどろどろとした情念のようなおぞましさを感じるのだ。

恐ろしいのは、それが自分だけでなく、大切な娘たちにも注がれてるという点だ。

「なに、そう心配するな、アイシャ。リザードマンの本拠地まではそう遠くない。順調ならこの遠征は一ヶ月で終わるだろう」

「はい。でも、できるだけ帰ってきてください、あなた」

「ああ、わかってる。私が指揮を執るのだ、誰一人として犠牲者を出すことなく、全員無事に帰ってくるこ

とを約束しよう」

エルフの英雄王はもう一度妻を抱き寄せ、キスをしてきた。しかし今度は額ではなく、柔らかな唇にだった。

「ん……」

夫の舌が優しく、しかし力強くアイシャの小さな唇を割って入ってくる。その温かい粘膜を、アイシャもまた、粘膜でもって出迎える。

「んんう、ん、んん……っ」

舌を吸われながらレオンの腕に抱き寄せられる。エルフらしく細身だが、女とは明らかに違う強靱なその身体の逞しさと熱とで、アイシャの小鼻がぷくりと膨らむ。

（ああ、あなた、あなたあ）

生まれたときからレオンに嫁ぐことが定められていたアイシャは、夫以外に男を知らない。唇を許したのもレオンだけだ。

（久々だわ、この人に求められるの。あの娘たちを産んでからはあまり愛してもらってなかったもの）

元来、エルフの男は人間など他の種族に比較して性欲が強い。長寿のため、急いで子孫を作らなくていいからではないか、と言われている。

それに対してエルフの女は男ほど淡泊ではない。寿

命が長いのは男と一緒にだが、若いうちに子を産みたいと考える本能のせいだろうと考えられている。あるいは、他種族よりも妊娠する確率が低いという点も影響してるかもしれない。

（結婚した当初は毎晩私を抱いてくれたのに）

二人の娘の母となった自分にはもう女としての魅力がないのかと落ち込んだ時期もあったが、レオンはときどき、忘れた頃にこうして求めてくれる。今日は、明日からの出陣に昂ぶってのものだろう。

「アイシャ、私のを元気にしてもらえるかい？」

「はい、あなた」

たつぷりとキスを交わしたのち、レオンは着ていた服を脱ぎ捨てながら妻に告げる。アイシャは頬や長い耳の先を赤らめながら夫の前に跪き、己の純潔を奪ってくれたペニスをそっと握る。

（やっぱり大きい……それに長くて……見ているだけでどきどきしちゃう）

他の大人の男性器などもちろん見たことはないが、それでも夫の肉竿が立派なのはわかる。レオンの男根は身長に比例して長い。人間族よりも二割は長いだろう。

「では……失礼します。あむン」

だがエルフのそれは性欲の乏しさによるものか、勃

起しにくく、したとしても硬度や保持時間で他種族の男に劣る。

「うう、いいぞアイシャ、キミの奉仕は最高だ……ああっ」

美妻に亀頭を咥えられたレオンが呻く。

（ああ、嬉しい、私のお口で感じてくれてるんだわ。

どうですかあなた、私のフェラチオは）

結婚し、子を産んでもなお初々しさと清楚さを失わないエルフの王妃は、その愛くるしい顔に似合わぬほどに頬を膨らませ、夫の長大なイチモツへの淫らな奉仕を続ける。

「ぢゅっ、ぢゅっ、ぢゅぢゅっ……ちゅぱ、ちゅっ、ちゅっ、じゅっ、じゅるるっ！」

結婚するまではキスも知らないエルフの乙女だったアイシャも、今は人妻らしい濃密なフェラチオで愛する夫の愚息にしゃぶりつく。

先端が喉にぶつかる寸前まで咥え込み、舌を激しく動かして裏筋を舐め上げる。

頬の内側や上顎の裏を使って亀頭を擦り、わざと大きな、卑猥な音を立てて夫の聴覚を刺激する。

右手で肉茎を前後にしごき、左手で陰囊を優しく撫でるなど、情熱的かつ献身的な奉仕を続けること約十分、エルフ王のペニスはいよいよやく挿入に耐えられるだ

けの硬度に達した。

（ああ、立派だわ。またこれで愛してもらえるのね。
嬉しい……っ）

自分の誕まみれになった屹立を見ているだけでアイ
シャの下腹部が期待に疼く。

なかなか硬くならない肉棒のせいで顎が疲れてるこ
とももう気にならなくなっていた。

「アイシャ、愛してる」

「私もよ、あなた……アアッ」

ベッドの上に仰向けに寝かされたアイシャの秘所に
待ち焦がれたものがあてがわれる。できれば夫にも前
戯をして欲しいという気持ちはあるが、愛撫してもら
ってるあいだにせっかく硬くした怒張が萎えていたら
意味がない。

「来てくださいませ。私の、アイシャの中にあなたの
逞しいものを……ウウッ！」

期待と興奮にすっかり潤んでいた膣道に亀頭がめり
込んできた。いくら潤っているとはいえ、まったくほ
ぐされてないせいで軽い痛みはあったが、この先に待
つ快感を思えばいくらでも耐えられる。

（ああっ、もっと、もっと奥に……ああっ、気持ち、
イイ……ッ）

硬さはやや不足していても、レオンのペニスにはそ

れを補う長さがあった。

「あなた、凄い……奥に来てます……あはぁ！」

最も妖精に近いエルフと称され、他種族にも多数のファンを持つ美しき王妃が、夫にしがみつきながら女の声を上げる。この広い世界でレオンにしか見せたことのない蕩けた顔を晒し、アイシャは喘いだ。

「いいぞ、いいぞアイシャ、キミの穴は最高だ……ぐうっ」

自慢の妻が見せる牝の反応に、レオンも声を上擦らせる。膣内の剛直が僅かではあったがその体積を増し、アイシャの蜜壺の奥を穿つ。

（あっ、あっ、そこ、そこがイイの、あなた、もっと奥に来て、私の、アイシャの深い場所をたくさん愛してっ）

浅ましいとは思いつつもアイシャは自ら腰を揺らし、勃起が気持ちいい場所に当たるように調節した。

人妻どころかまだ少女としても通用するくらいに瑞々しい顔は肉欲に弛み、娘たちを産んでからさらに豊かさを増した乳房の頂点はぷくりと膨らんでいる。

「ああっ、あん、あっ、あぁんん！」

細長い肉筒に貫かれた女陰からは白い本気汁が溢れ出し、エルフ妻が得ている悦楽の大きさと深さを示していた。

（あと少し、あと少しでイキます、アイシャ、果ててしまします……！）

こつこつと子宮口をノックされるたびに急速に性感が上昇し、アイシャにオルガスムスの瞬間が近づく。

「イクぞ、私もこのまま出すぞ……くうう……ッ」

「私も、私も一緒に……アアアッ」

夫のやや性急な射精を追いかけられるようにアイシャも腰をくねらせ、なんとかぎりぎりでアクメの悦びを引き寄せる。

（ああっ、温かい……レオンの子種でばかばかしてる……う）

耳元に聞こえるレオンの荒い呼吸音と膣奥に感じるザーメンの熱に、アイシャは女の、人妻の幸せに浸る。

「よかったよ、アイシャ」

「私もよ、あなた」

そして重なる唇に、アイシャはうっとりした表情を浮かべる。

（幸せだわ、私）

女としてこれ以上の悦びなどないと、アイシャは愛しい夫の汗まみれの身体にしがみつきながら改めて思うのだった。

三日目

夫であるレオン王が軍の率いて国を発ったことで、アイシャは王妃としての業務に忙殺された。

国民の大半を占めるエルフは戦いを好まない種族のため、エルフ王国は基本的には穏やかで平和だ。森を中心とした国土は資源にも恵まれ、近隣諸国との関係も今のところは特に問題はない。

それでも一国の王が不在というのは施政においては大きく、名目上はナンバーツーであるアイシャに回される仕事は少なくなかった。

「ふう……まだ終わらないのかしら、これ」

レオンが発して三日目の夜、アイシャはいつこうに低くならない書類の山を前に、初めて弱音を吐いた。「これに目を通していただければ、当面、そうですね、数日は落ち着きます、王妃」

普段は王の側近として内政を取り仕切っている内務大臣がにっこりと微笑みつつ、新たな書類をアイシャの目の前に置く。

「それって逆に言えば、また数日後には同じくらい忙しくなるってことよね？」

「ははは、まあ、否定はしません。ですが、これでも

昔に比べるとずいぶんと楽になってるのですよ」

初老の大臣の言葉にアイシャは首を傾げる。

「楽に？ どうして？」

「ギュネイ殿ですよ。あの魔術師殿は事務仕事の効率化を以前から王に進言しておりましたな、具体的な方策も指示し、現在では昔に比べて三割ほど楽になっておるはずです」

「……あの人間は、内政にまで口を出してるの？」

「ああ、王妃はギュネイ殿があまり好きではないのでしたな」

「そういうわけでは……」

「気持ちわかります。私も当初は胡散臭いと感じてましたからな。しかし、あの男の魔術と知識は本物ですぞ」

「それは……私も理解してるけど」

アイシャは渋々と認める。面白くないときに唇を尖らせるのは子供の頃からのクセだ。

「確かに我々、政に携わる者の中にはギュネイ殿を快く思っていない輩も多くおります。が、それ以外の者には実は人気があるのですよ、あの人間の魔術師殿は」

「そう、なの？」

書類にサインをしつつ、話の先を促す。

「ええ。彼の魔術師は薬も調合してましてな、これの

評判がすこぶるよいのです」

「薬……ああ、そう言えばあの人も飲んでいたわ」

レオンが熱を出して臥せったとき、ギュネイが煎じたという薬を飲んでいたことを思い出す。確かに熱はすぐ下がっていた。

「実は私も調合してもらっております。ギュネイ殿の薬のおかげで難儀していた腰と膝の痛みが軽くなりましてな」

薬草に微量の魔力を混ぜ込んだもので、服用する相手に合わせて調合するため、非常によく効くのだという。

「特に一部の女性に人気があるようです」

「どうして？」

「私も詳しくは知りませんが、美容に効果があるのだとか」

エルフ族は基本的に美男美女揃いだが、もちろん全員ではない。そしてたとえ美女であろうとも、否、だからこそ美への欲求は他種族よりも強い。

それはアイシャとて例外ではなかった。

（確かに私、子供を産んでから少し肌の潤いが落ちたような気も……）

むしろ人妻・母親となった今のほうが色香が増して美しいというのが周囲の大半の評価なのだが、アイシ

ヤ本人にはわからない。

無意識に己の頬を指で撫でる王妃を見て気を利かせたのだろう、大臣はこう付け加えた。

「もしよろしければ私のほうからギュネイ殿に薬を調合してもらえないか話してみますか？　このところの書類作業で肩が凝っているでしょうから、それを和らげる薬を調合してもらおうというのはいかがですか？」

「そ、そうね。確かに慣れない仕事で少し肩が重いかもしれないわ」

「それはいいけません。王妃には王が戻られるまで、しっかりと働いていただかないと困りますからな。早速、ギュネイ殿に話を通しておきましょう」

「え、ええ、せっかくだからお任せするわ」

「承知しました。……それでは王妃、今日はあとここまで目を通してください」

「……わかったわ」

新たに追加された書類の束に苦笑しながら、アイシヤは再びペンを持った。

確かに、肩は重くなっていた。

これが夫が日々こなしている仕事の重みだと思えば、誇らしくも感じるが、華奢なエルフの王妃にとって、やはり鬱陶しい凝りでもあった。

（そんなに効くというのなら、一度試してみるのもいいかもしれないわね）

人間族であるギユネイがエルフ族のブレーンとして採用されたのはもちろん偶然ではない。最終の目的のために練り上げた緻密な計画の結果である。

肉体を鍛え、知識を蓄え、魔術を磨き、ありとあらゆる手段を駆使して次期エルフ王レオンに近づき、仲間として各地を渡り歩いた。

（レオン王たちとの冒険は、確かに心躍るものでしたが……）

子供の頃に一目惚れしたエルフの王女アイシャにもう一度会おうというのが初期の目的であったが、現在ではその夢も大きく歪み、別のものへと変貌している。恋や憧れや夢といったものに、醜い欲望が新たに加わっていた。

三十五年という時間はエルフにとってはそう長くなくとも、一人の人間の少年を狂わせるには充分過ぎたのだ。

（私にとっての夢は、今やあの王妃様にとってはただの悪夢でしかないですね）

ギユネイのために城内に設けられた専用の研究室で、

中年の魔術師は自嘲気味に口元を歪める。子供の頃にはなかった頬の皺が、ここまで到達するまでの年月の長さを物語る。

（長かった。本当に、長かった）

各地から集めた植物などの魔法薬の材料を器用に加
工し、瓶の中に入れて火にかける。

懐中時計で厳密に加熱時間を計り、長年の研究の末
に見つけ出した沸騰寸前のポイントで呪文を詠唱し、
魔力を込める。

あとはできあがった液体を水で一気に冷やせば、特
製の魔法薬の完成だ。

（あの日からもう四十年近く経ったのですか）

完成した薬を瓶に移しながら、ギュネイは遠い記憶
に想いを馳せる。瞼を閉じれば、王女時代のアイシャ
の瑞々しい笑顔が鮮明に甦る。

（あなたが悪いんですよ、王妃様。勝手に私以外の男
と結婚して、しかも二人も娘を産むだなんて。とんだ
裏切り行為です。男子などではなく、マリナ様、ミリス
様という美しい王女であった点は不幸中の幸いでし
たが）

ギュネイはただ憧れの姫の側にいたい、あの鮮やかな
緑の瞳に自分のことを映して欲しい、少しでも力に
なりたい、それだけの思いで魔術を学んだのだ。

しかし年月とともに純真な憧れは爛れた肉欲交じりに変貌し、真っ直ぐだった想いは狂気を内包する。

あるいはアイシャが長寿のエルフでなく、ギユネイが重ねた時間の分だけその美しさを衰えさせていれば、ここまで狂気が育つことはなかったかもしれない。

だが、アイシャは今も美しい。それがギユネイを衝き動かす澱んだエネルギーになってしまう。

（さて、邪魔なレオン王には退出していただきました。どんなに早くてもこの国に戻ってくるのは一ヶ月後。充分です。アイシャ様には私の女になってもらいます……！）

薄暗い研究室で一人、ギユネイは声にならない声で笑い続けた。

四日目

大臣は本当にすぐに話を通したらしく、この日の夜には早速、ギュネイが薬を携えてやって来た。すでにアイシャのために特別に調合した魔法薬の準備ができているという。

（そんなに早く作れるものなのね、お薬って）
てっきり飲み薬だと思っていたが、塗り薬らしい。
「塗布方法にコツがありますので、私の助手にやらせたいのですが、いかがでしょう」

もしこれがギュネイ本人、あるいは男の助手であれば絶対に断ったが、紹介されたのはアイシャよりも少し歳上らしい若い（あくまでもエルフの感覚で、だが）女だったので、少し考えたのちに承諾した。

（ギュネイの薬は本当によく効くようだし、試してみるのも悪くないわね）

アイシャにそう決断させたのは、一晚経って一気に重くなった肩の影響も大きかった。慣れない書類仕事は想像以上に若王妃の肩を痛めていたのだ。

「それでは失礼いたします、アイシャ様」

ナインという名の助手を自室に招き入れると、早速薬の塗布が始まった。

同性という気安さもあり、言われるままにドレスを脱ぎ、半裸になってベッドに俯せに横たわる。もちろん胸は腕やタオルで隠すが、背中是完全にナインに晒す格好だ。

「素敵ですわ、アイシャ様の肌」

ナインはアイシャの肩から背中にかけて、丁寧に、優しく薬を塗っていく。

「あまり見ないでちょうだい、恥ずかしいわ。もう若くないんですもの」

謙遜しつつも、アイシャは嬉しさを隠せない。夫からはあまりこのような言葉をかけてもらえないからだ。（このあいだの夜も、結局一度しか愛してくださらなかったし）

「あら、アイシャ様が若くなかったら、私はどうなるんですか？」

「ご、ごめんなさい、そういう意味じゃなかったのよ。だってあなた、とても綺麗な肌をしてるんだもの」

これはお世辞ではなく、本心からの言葉だった。

ナインの年齢はアイシャの想像よりもずっと上で、しかも既婚者で、子供も二人いるというのだ。

「ありがとうございます。もし私の肌が綺麗だとするなら、それはギュネイ先生の薬のおかげでしょう」

「薬？」

「先生は女性のために美容の魔法薬も調合しています。ただし材料が稀少のため高価ですし、手間の関係でまだそれほど作れませんので、ごく一部の常連の方にしかお渡しできないのです」

「そう、なの」

アイシャは務めて興味なさそうに相槌を打って見たが、うまくできた自信はない。

ナインはそんなアイシャの反応にはなにも言わずに、特製の湿布薬を塗り込んでいく。

「なんだかマッサージみたいね、これ」

「ええ、ただ薬を塗るだけでなく、同時に身体のツボを刺激しているんです。先生の考えでは身体にはキーとなるポイント、いわゆるツボがあり、それらを繋ぐラインを押圧することでより薬の効果を上げられるそうです」

「魔術師はそういうことまで詳しいの？」

「いえ、先生は特別です。あの方は魔術だけでなく、様々な知識や経験を総合的に融合させているから凄いのです。……どうですか、痛いところはありませんか？」

ナインがどうしてそこまで人間であるギュネイを持ち上げるのか気になったが、質問する前に先に尋ねられた。

「大丈夫よ。痛いどころか、凄く気持ちいいわ。このまま寝てしまいたいくらいよ」

「こういうときは寝てくださいってもかまいません。そのほうが快復は早まります」

ナインのこの言葉に甘え、アイシャは瞼の重みに屈する。自分でも思っていた以上に疲れていたらしい。

翌日、肩や背中、腰が驚くくらいに軽く、アイシャはギュネイの凄さを初めてその身で実感した。

十日目

夫であるレオンが遠征に出て十日が過ぎた。そしてそれは、アイシャがギュネイの魔法薬を利用し始めて一週間が経ったことでもある。

最初の二日間は凝りをほぐす薬だけだったが、ナインの勧めもあり、三日目からは美容薬の塗布も頼んだ。美しくなりたいという女の欲望には勝てなかったのだ。端から見てもわからなかったかもしれないが、アイシャ本人にはすぐに実感できるほどの効果があった。肌の張りが全然違っていた。

（凄いわ。まるで出産する前に戻ったみたい）

このまま薬を塗り続ければレオン様が帰還する頃には結婚前の肌に戻れますよ、というナインの言葉もアイシャの心を揺り動かした。

（昔の私に戻れば、あの人もまた、新婚当初みたいに私を愛してくれるかもしれない）

そしてアイシャは毎晩ナインを自室に呼び寄せ、特製の魔法薬とマッサージにその身を委ねた。

「これは心をリラックスさせるお香です」

「このローションは毛穴に潜り込み、老廃物を掃除する効果があります」

「先生が煎じてくださったこのお茶は、身体の中から
若返らせてくれます」

日に日に増えていくアイテムに、アイシャはもうな
んの疑問を抱かなかった。

（ああ、なんだか身体が温かい。ナインのマッサージ
もとても気持ちいいわ）

胸と股間をかるうじてタオルで隠すだけの半裸を晒
すことにも、身体のあちこちを触られることにももう
慣れてしまった。ナインが自分と同じ子を持つ人妻だ
ったせいもあるだろう。

レオンの代理としての仕事は減ることなく逆に増え
ていたが、全身の疲れはもうどこにも感じない。疲労
や凝りどころか、まるで結婚前の少女だった頃よう
に身体が軽いのだ。

（肌もつやつやだし、これならあの人が帰ってきたと
き、驚かせてあげられるわ）

もはやアイシャは、ギュネイの魔法薬の確かさをま
ったく疑っていなかった。

だからこの日、ナインから「ギュネイ先生が特別に
新しい薬を用意してくれているそうですが、いかがな
さいですか」と尋ねられたとき、いくらかの逡巡のの
ち、首を縦に振ってしまった。

「あなたも一緒にいてくれるのよね、ナイン？」

「はい、もちろんです、アイシャ様」

「だったら……お願いするわ」

このときのアイシャはまだ、己がとくに悪魔の姦計に陥っていたことに気づいてはいなかった。

魔術師としてのギュネイは信用できたとしても、アイシャはまだギュネイ本人には警戒心を解いていなかった。

王女時代、特使として各地を周り、様々な国で多くの種族と接してきたアイシャは、他の一般的なエルフほど人間族に対して偏見を抱いていない。

だからアイシャがギュネイに対してネガティブな印象を抱いてるのは、人間族だからというわけではなく、ギュネイという個人になにかを感じるからだろう。

（どうして私はあの人間の魔術師にここまで不安を覚えるのかしら）

ギュネイの能力に関してはなにも問題はない。ギュネイに好感を抱いてない者たちは多いが、それはギュネイが人間であるという一点のみが原因だ。

実際にギュネイを嫌っている大臣たちも、彼を政治の場から追放しようとはしていない。

また、ギュネイがこのエルフ王国に害をなす存在か

という疑念も払拭していいだろう。あの魔術師がレオンの仲間となってから十数年、国に仕官してからも十年近くが経過している。エルフにとってもそれなりの時間だし、寿命が短い人間にしてみれば相当な長さだ。（これだけのあいだレオンや我が国に仕えてくれたのだから、他国のスパイという可能性は考えにくいし）王であるレオンからの信頼が厚いギュネイがその気になれば、裏切りや不正行為などやり放題だろう。それだけの立場と権限があるからだ。また、英雄王レオンを支えた強力な魔術師でもあるギュネイには、他国からの引き抜きの話も多いという。

（そもそもあの人はなぜ、人間なのにこの国で、自分にあまり好意的でないエルフたちに囲まれて生きることを選択したのかしら）

ギュネイは独身で家族もない。別に、わざわざここで暮らす意味がアイシャには見出せない。

（なにか、この国に留まり続ける理由が……？）

そんなアイシャの詮索を遮るようにドアがノックされた。ナインとギュネイだった。

「夜分遅く失礼します、アイシャ王妃」

「いえ、頼んだのはこちらです。どうぞ中へ」

恭しく頭を下げたギュネイはいつもと違い、黒いマントを着用していなかった。ナインと同じように白衣

を纏っている。

「ああ、これですか？ 私があのような、いかにも魔術師という格好をするのは、ある種の威嚇行為だからです。その必要がないときは、こういった服も着用します」

「威嚇、ですか？」

「ご覧のとおり私はあなたがたエルフに比べてはもちろん、人間の男としても背が低いです。だからせめて外見だけでもそれらしくして虚勢を張っているのですよ」

ギュネイはそう言って笑うと、

「では、早速始めましょうか」

持って来た大きなバッグから透明な液体の入ったビンを取り出した。これまでナインが使っていたものは別の魔法薬のようだ。

「え、ええ。その……」

「ああ、ご心配なく、服装は……そうですね、そのままで結構です。まずは私が王妃の顔や肩に薬を塗り特殊なマッサージをしますが、その後はナインに任せますので」

夫以外の男にみだりに肌を晒したり触れさせるのは抵抗があったアイシャの懸念を、ギュネイは先回りして払拭してくれた。意外に気が回る男らしい。

「本当は最初からナインに任せればよいのでしようが、今回は王妃専用に配合した薬ですので、今後の改良のために反応を確認させていただきたいのです」

「そういうことなら、私はかまいません」

「ありがとうございます。……それでは、その椅子に腰かけてください」

ギユネイが担当するのは顔と肩だけだから、いつものようにベッドに横たわらなくていいというのは、アイシャにとっても幸いだった。いくらナインもいるとはいえ、私室で、夫ではない男の前でベッドに寝るのはやはり抵抗がある。

（この人間、もしかしてレオンが言うとおりに信用できる人物なのかもしれないわね）

そんなことを思いながらアイシャは椅子に腰かけ、人間の魔術師の施術に身を任せた。

特製の美容薬がゆっくりと、静かに、丁寧に己の顔やドレスから剥き出しの肩に塗布されていく。ギュネイの手のひらで人肌に温められた液体状の魔法薬がじわじわと肌に染み込んでくるのがわかる。

（ナインよりも大きな指。あの人よりもごつごつしてるわ）

目を閉じているせいかな触覚がより鋭敏になり、ギュネイの指の形がはっきりと感じ取れる。女のナインとも、夫のレオンとも違う感触はどこか新鮮だった。

（あ。これ、お香だわ。でも、いつもと違う香り。これも特製なのかしら）

これまでもナインにマッサージをしてもらってるときにはリラックス効果のある香が焚かれていたが、今回はまたちよっと異なるアロマだった。

「ナインに持たせていたものよりもより深い鎮静効果のある香木です。無論、多少ですが魔力も含まれています。王妃のように心身ともに疲弊してる方には効果があるかと」

「そう、ね。いい香りだわ。……え？」

突然目の周囲に温かいものがかぶさってきた。

「ご安心ください、目の周囲のほぐしが終わったので、蒸しタオルを置いてだけです。かなり凝っていましたので」

「自分ではよくわからないのだけど」

「目だけではありません、肩も相当張ってます」

「んんっ」

それまで目の周囲や頬を撫でていた手が突然肩に触れてきたので、思わず声が出てしまった。

「驚かせましたか、失礼。……ほら、わかりますか、私の指がこれ以上奥に沈んでいかないのが。つまり、それだけ王妃の肩が疲れている証拠です」

ギュネイは何事もなかったように淡々とアイシャの肩を揉みほぐしていく。無骨な、けれど逞しい指がエルフの細く華奢な肩をぐいぐいと押圧するたびに軽い痛みと、それ以上の心地よさが生じる。

（あ、気持ち、いい。ナインのよりもずっと力が強く、凄くほぐれる感じ）

ナインは皮膚の表面を撫でるようなタッチだったのに対し、ギュネイのそれはより深い場所までほぐすようなマッサージだ。痛いことは痛いだが、心地よさと同居する力加減が絶妙だ。

「滞った血やリンパなどを動かします」

顔面のマッサージが終わると、次は肩や首筋へと指が移った。

「ん……ん……っ」

ごりごりと強引に血を流されるような感触は生まれ

て初めてだった。軽い痛みはあるものの、一度慣れるとそれが妙にクセとなる。

「疲れていたのですね。あなたのような美しく可憐な方にこのような凝りは似合いません」

「あっ……んん……んふ……ん」

心地よいマッサージと魔法薬、そして香のせいか、全身がぽかぽかと温かくなってきた。ツボを的確に刺激されるごとに、美貌の王妃は知らず、声を漏らしてしまう。

（なに、これ、凄くいい……気持ちいいわ）

アイシャはまだ気づいていない。己の身体にはすでに大量の魔法薬が染み込んでいることを。自分を眨めるためにだけに調合された特殊なローションと香が全身を冒しつつあることを。

そして、アイシャの目がタオルで塞がれてるのをいいことに、椅子に座ったエルフ妻の女体をギュネイが視姦していることにも。

「いかがですか王妃、痛いところなどはございませんか？」

「ええ。とても、その……心地よいわ」

気持ちいい、と言いかけて、咄嗟に別の表現に置き換える。普段ならば気にしないような言葉だが、今、それを口にするのはなぜかいけないと感じたのだ。

しかしその直感は実は正しい。アイシャ本人はまだ自覚してなかったが、この高貴なエルフの女体は、すでに魔術師の罠に落ちつつあったからだ。

「そうですか。では、もう少し範囲を広げましょう」
「えっ……ああっ」

露出している肌にしか触れないと言ったはずのギュネイの指が、初めてドレスの上からアイシャの身体を這い始めた。

まずはより首に近い肩を、そしてそこから背中に続く肩甲骨のラインを。

「デスクワークはどうしてもこの一帯が凝りますから」

いつもであればすぐにでも身をよじっただろうが、アイシャはそうしなかった。できなかった。

（本当に、背中、気持ちイイ……）

アイシャはすでにマッサージの心地よさをナインによって知っている。しかもギュネイの指の動きは助手であるナインよりもずっと的確にアイシャのツボを刺激してくれる。

（そうよ、これはただのマッサージ、あまり露骨に拒むのも失礼だわ。いくら他種族であってもギュネイはこの国の王の、夫の大切な仲間であり側近なのだから）

慣れない仕事に知らず疲弊していた人妻エルフは心の中で言い訳すると、椅子の上で自ら軽く上体を前に倒す。これはもっと広い範囲を、背中だけでなく腰までほぐして欲しいという無言のアピールだ。

けれどアイシャはまだ気づいていない。己の女体が得ているこの心地よさには、もっと別の理由が隠されていることに。

それを知っているのは先ほどから勝手にもぞもぞと蠢いているアイシャの下半身と、美しいエルフを邪悪な瞳で見下ろす人間の魔術師だけだった。

（ふむ、思ったよりも薬の効き具合が弱いですね。想定よりも女としての成熟度が低いのもかもしれません。ナインでの事前テストだと、もうとっくに腰砕けになっていました）

椅子に腰かけたまま前屈みになったせいで目を覆っていたタオルは床に落ちていたが、アイシャは特に気にもしていない様子だ。それだけアイシャがギュネイの施術に夢中になっている証拠といえる。

無論、いくらギュネイのマッサージが巧みであるとはいえ、それだけでは一国の王妃がここまであっさりと夫でない男への接触を許さないだろう。そもそもア

イシャが自分に警戒心を抱いてることを知らぬギュネイではないのだ。

（ナイン、そろそろです）

エルフ王妃の柔らかな背中との感触を指で楽しみつつ、ここまで無言で控えていた助手に目で合図を送る。

アイシャの予行演習のためにまったく同じことをされた記憶を思い返していたのか、ナインは羨ましそうな、あるいは物欲しそうな瞳でギュネイを見たものの、あらかじめ打ち合わせしておいたとおりに音を立てずに部屋を出て行った。

（あとでナインにもすっかり礼をしてあげないといけませんね）

ナインが出て行き、部屋に夫以外の男と二人きりになったことにもアイシャは気づいていない。ドアが閉まる音よりも、腰に下がってきたギュネイの指のほうが重要なのだろう。

「んっ……んっ……んん……っ」

親指でツボを刺激するたびに、押し殺したような、けれどかすかに甘いものの混じった声が漏れ出る。本人にその自覚があるかは微妙だが、明らかに性的な快感が含まれた声だった。

（強力な媚薬を数種類ブレンドした特製のローションと香木に加え、性欲を増加させるツボを押してるんで

す、これで発情しなかったらもう女ではありませんよ）

ギュネイがその気になれば、こんな回りくどいことなどしなくとも即座に女を堕とせる魔法薬も作れる。しかしそれでは麻薬を使って廃人にするのと変わらない。

ギュネイが求めているのは女が堕ちるまでの過程を含めた結果であって、その中間を省く行為に意味は見出せない。

（さあ、見せてもらいますよアイシャ様。かつて幼い私を魅了したエルフの至宝の、可憐さに隠された牝の貌を……！）

ギュネイは腰部へのマッサージを中断すると即座にアイシャの身体を抱き上げる。

「な、なにを」

「あの姿勢では王妃も苦しいでしょうから、ベッドに移動します。ああ、ご安心を、もちろん服は着たままで結構です、王妃はなにも心配なさらず、私に身を任せてください」

当然、こんなセリフだけで納得させることは無理だが、アイシャがなにか言ってくるよりも先にギュネイは次の行動、すなわちベッドへの移動を開始する。

ただでさえエルフ族は長身なのに対し、ギュネイは

人間族の平均よりも明らかに低い。が、若い頃から鍛え上げ、魔術によるドーピングも加えた強健な肉体は、楽々とアイシャを椅子からベッドへと運んでいく。

「さあ、続きをしましょう」

隣室のベッドに獲物を俯せに寝かせると、ギユネイはアイシャがなにか言おうとするのを遮るようにマッサージという名目の愛撫を再開した。

王妃が逃れられないよう、まずは身体の重心である腰に強めの指圧を加える。

「ああっ」

「やはりずいぶんと凝っていますね。座ったままですとこの辺りに負担がかかるのです」

腰を中心に背筋をほぐしていく。諦めたのか、心地よさに屈したのか、アイシャは寝そべったままもうなにも言っていない。ただ枕に顔を埋めているだけだ。

（さて、もうだいぶ薬も回った頃ですね）

懷中時計を見る。ナインを使つての実験では、もう魔法薬の効果が出てくる頃合いだ。

「長時間座っていますと、ここが凝ります」

「ひっ!？」

アイシャが枕から顔を上げて小さな悲鳴を漏らしたのは、ギユネイが臀部を親指でぐいぐいと刺激し始めたからだ。

マッサージでは一般的な施術だが、一国の王妃のヒップを他種族の男が触っている事実に変わりはない。そもそも、ギュネイの目的はマッサージなどではない。「ほら、こちら辺が硬くなってます。血行が悪くなってる証拠です」

子を産んだとは思えぬほどに弾力に満ちた尻肉の感触を楽しみつつ、鼠径部にも指圧を加える。秘所に近い分、尻よりも際どい箇所だ。

「んん……！」

（お、ようやくいい声が出てきましたね）

アイシャの口からこぼれた声は、今までとは明らかに異なっていた。

それは本人もわかっているのか、慌てたように再び顔を枕に埋め、声が出ないように堪えている。

（残念ですが、もう遅いです。私の薬はとっくにあなたの身体の隅々に行き渡っていますから、あとは高まる一方ですよ）

中年魔術師は邪悪な表情を浮かべたまま、憐れな美妻のさらに際どい部分へとその節くれ立った指を伸ばした。

（わ、私、なんて声を出してるの……っ）

本来ならばすぐにでもこの無礼な人間にこれ以上の行為をやめさせるべく、叱責しなければならぬ。だがアイシャはそれができなかった。ただ顔を上げ、背後のギュネイにやめろと命じるだけのことが、今のアイシャにはとてつもなく難しいのだ。

（どうして、どうしてこんなに私の身体、敏感になってるの？）

下半身を触られて初めてアイシャは気づいた。気づかされた。己の女体がいつの間にかマッサージによる心地よさとは別種の愉悦に浸っていたことに。

（イヤなのに、あの人以外の男にお尻を触られるなんておぞましいはずなのに、なぜ私はあんなはしたない声を上げてしまったの？　なぜ身体に力が入らないの？）

人妻として、王妃としての理性は一刻も早くこの男の魔手から逃れなくては警告を発している。にもかかわらずアイシャの肢体はじわじわと込み上げてくる感覚にもっと浸っていたいと抵抗するのだ。

いや、アイシャももう理解している。遅まきながら理解してしまっている。ギュネイの触れたところから広がっているこの甘い波がなんなのかを。

（嘘よ、嘘。私はレオンの、国王の妻なのよ、王妃な

のよ？　こんな人間の魔術師に触られて感じるはずなんてないわ）

しかしいくら心が否定しようとも、女として成熟した人妻の肉体は確実に悦びを得ている。

ギュネイはいつの間にか大胆に尻を揉み始め、二人の娘を授かった形よい柔肉の弾力を味わっていた。

「や、やめなさい、ギュネイ！　それ以上は許しませんよ！」

どうにか顔を上げて背後の魔術師を睨みつけるが、「おや、王妃はなにか勘違いをなされてるようですね。これはただのマッサージです。子を生まれた方はどうしても尻の位置が下がりますから、こうして持ち上げているですよ」

ギュネイは笑みを浮かべたまま、驚掴みにしたアイシャの美尻から手を放さない。

「おっと、トップの位置が下がるのは乳房もでしたね。なに、ご安心ください、尻が終わったら次はその大きな乳もマッサージいたしますよ、王妃様。ふふふっ」
もう間違いなかった。

（この男、まさか最初から……！）

「ナイン、ナイン！　誰でもいいわ、誰か来て、誰かっ！」

己の身に迫った危機にアイシャは助けを呼んだが、

誰も部屋にやって来る気配がない。

「ああ、言い忘れておりましたが、この部屋には結界を張らせてもらいました。たとえドラゴンが咆哮したとしても外にはなにも聞こえませんかからご安心を」

酷薄に目を細めたギュネイの勝ち誇った笑みに、アイシャは初めて恐怖を覚えた。

「まさかナインも……っ」

「ああ、彼女はとっくに部屋から出て行きましたよ。今頃は一人悶々と私の帰りを待っているでしょう。なにしろあの人妻、私の肉棒なしではもう生きられない身体になってしまいましたからね」

耳を覆いたくなるような話だった。

「大丈夫ですよ、すぐにあなたもナインと同じように、私のペニスが大好きな女になります。淡泊なレオン王と違って私は絶倫ですからね」

「ッ！」

愛する夫を愚弄されてカッとなったアイシャの手が反射的に動き、ギュネイの頬を叩いていた。

「ほお、いい反応です。いいです、実にいい。まだそれだけ動けるなら、存分に楽しませてもらうとしましょう。なにしろ何十年もこの瞬間を待ち焦がれたんですからね。くくっ」

赤く腫れた頬を楽しげにさすりながらにたとえたと笑

うギュネイにアイシャは戦慄した。

この男の歪んだ欲望の深さと、己の置かれた絶望的な状況に泣きたくなるが、王妃としての矜持がそれをぎりぎりで押し止める。

「い、今ならまだ水に流してあげてもいいです、魔術師ギュネイ。あなたのここまでの忠誠と功績に免じて……きやあっ！」

ギュネイの手がドレスの裾を捲り上げ、アイシャの臀部を包む下着を曝け出す。と同時にオーバーニーツックスから露出した太腿の上部を直に撫で回される。

「可愛い声ですね、王妃。とても二人の娘を産んだとは思えないくらいあなたは昔と変わらずに愛くるしい」

エルフ王妃は四つん這いで逃れようとするが、身体に力が入らず、ギュネイに軽く背中を押されただけであっさりと組み敷かれてしまった。

「無駄ですよ。もう薬は完全に回ってるんです、諦めてもらいませんか」

（薬……ああ、やっぱり最初から罠だったのね）

美しい顔に絶望が浮かぶ。

「ひどいことはしませんよ。美容の薬ってのも嘘ではありません。あなたの大事な王子様が帰ってくる頃には見違えるくらいに綺麗になってることも保証しまし

よう」

ギュネイはそう言うと、悲しみと後悔に涙ぐむアイシャから容赦なくドレスを脱がしにかかる。

「やめなさい、それ以上は本当に許しませんよ、ギュネイ！」

「許さない、とは？」

「し、死にます、あなたのような者に穢されるくらいなら、私は誇りあるエルフの王妃として、舌を噛み切って命を絶ちます！」

このセリフは脅しなどではなかった。

愛する夫と娘たちに顔向けできない恥辱を味わうくらいであれば、自ら死を選ぶ覚悟だった。

だがこの凌辱者はそんなアイシャの決意すら嘲笑した。

「なるほどなるほど、それでこそ音に聞こえたエルフの美姫です。だがよろしいのですか、あなたが死を選べば、大事な夫や子供たちもひどい目に遭いますよ？」

「!？」

「まずレオン王ですが、彼を守護している魔法の防具を作ったのは誰かご存じでしょう？ ちょっと魔力を切断してやれば、あれはただの鉄です。リザードマンどもの前では鉄どころかただの紙にしかすぎません」

「そんなんっ」

「そして私は、別にあなたではなく、あなたの愛する娘たちでもいっこうに構わないのですよ。長女のマリナ様はかつての、私が初めて見たときのあなたの面影が強いですし、次女のミリス様もタイプこそ違えど、なかなか魅力的な方ですからね」

このときに見せたギュネイの表情にアイシヤは戦慄した。

（本気、だわ。この男は本気で夫や娘たちを狙う……！）

ここで自分が命を絶てば、必ずやギュネイは夫を謀略の末に亡き者にし、そして大切な二人の娘をその欲望の捌け口とすることだろう。

（それだけは……それだけはなんとしても避けなければ）

アイシヤは唇を噛み、悔しさに目尻に涙を浮かべたまま決断した。苦渋の選択をした。

「……あの人と、娘たちには手を出さないと約束をして」

「頭のいい女性は好きですよ。そしてあなたは実に聡明な方だ」

「約束して」

「約束しましょう。あなたが私の美容術を受けてくだ

さるなら、私はこれまでどおりレオン王に忠誠を誓い、この国の繁栄のために我が力を惜しみなく注ぎましよう」

「美容術？」

「ええ、私はあくまでも女性の美しさのために施術してるだけです。だから王妃が心配するようなことなどありませんよ」

無論、ギュネイの吐くセリフのすべては詭弁だとわかっていた。わかっていたが、それでも救いを求める心がアイシャに偽りの希望を見せてしまう。

「そう……それならば特別に許します。ただし、美容術以上のことは許しませんよ、魔術師ギュネイ」

「ええ、重ねて約束いたします、麗しの王妃アイシャ様」

覚悟を決めたアイシャはドレスを脱がそうとするギュネイの手を払い、自ら半裸を晒した。脱がされるのではなく自ら脱ぐことで、これはいかがわしい行為ではなくただのマッサージなのだと言ひ聞かせるためだ。

（そうよ、ナインの前ではタオルだけの格好になっていたじゃないの。あれに比べたら下着があるだけずっ

とまじだわ)

けれど、夫以外の男に下着姿を晒すのは覚悟していた以上につらかった。タオルで半裸を隠そうとしても、ギユネイがそれを許してはくれないのだ。

あとはもう言われるままにベッドに横たわり、先ほどまでの続きを受け入れる道しか憐れな王妃には残されていない。

「ほお、なかなか扇情的な下着を常用されてるんですね」

「うう」

アイシャを守る最後の砦となったランジェリーに注がれる視線と揶揄の言葉に耳の先まで熱くなる。

今日のアイシャが纏っている下着は上がスリッパ、下がショーツ、そしてガーターベルトにストッキングだが、普段からよく使っている組み合わせだけに、これを扇情的と指摘されたのは少なからずショックだった。

「せ、扇情的だなんて。このくらいは王妃として、王族として当然の身だしなみよ」

「なるほどなるほど、つまり王妃様は常にそのような下着を纏ったまま国民の前に立ち続けてたのですね」

「そのような言い方、おやめなさいっ」

アイシャの言い分のほうが正しいのだが、余裕たっ

ぷりのギュネイの前では自信がなくなっていく。だからつい、鋭い声を出してしまう。

「ああ、そうでしたね、たとえば清楚な下着であったとしても、アイシャ様そのものが淫らでは意味がありませんでした」

「ぶ、無礼な……ひいっ!？」

さすがにカッとしたアイシャの口から飛び出たのは、しかし、叱責ではなく悲鳴だった。ギュネイの両手がいきなりスリップの上から乳房に触れてきたのだ。

「おや、軽く触れただけなのですが、ずいぶんと敏感ですね。この程度のマッサージでこれでは先が思い遣られますよ?」

にやにやと笑う魔術師にアイシャは慌てて唇を閉じ、目を瞑る。

（言い返してはダメ。いちいち反応して逆らってもこの卑劣な男を歓ばせるだけだわ。ここは耐えるの。私が人形のようにじっとしていればきつと飽きるはずよ）

ギュネイはただのマッサージしかしないと約束した。この人間は確かに卑劣だが、自分から言い出した約束は守るだろうという予測がアイシャにはあった。

魔術師の多くがそうであるようにギュネイもまた頭がよく、そしてそれに比例してプライドも高い。アイ

シャはそのプライドの高さに賭けたのだ。

（我慢できるわ。だってたかがマッサージだもの。あの人の、レオンの慈しむような愛撫に比べたらこんな人間の手なんておぞましいだけよ）

けれどアイシャはいくつもの思い違いをしていた。

己の女体が自分で思う以上に乾いていたこと。

ギュネイの魔法薬や香木の効果が時間経過とともにさらに増してきたこと。

そして夫よりもこの魔術師のほうが遙かに女の扱いに長けていたこと、である。

「ああっ、やめて、そんなふうに触らないで……イヤ、イヤァ！」

「くううッ、ううッ、んううウッ！」

「ダメダメダメ、ああっ、やめて、もうそれ以上は許して……ひいん!!」

エルフ王妃が懇願の悲鳴を部屋に響かせるのに要した時間はわずか十分でしかなかった。しかもギュネイが触れたのはアイシャの乳房のみ、それもランジェリーの上からだった。

さらに言えばギュネイは一度も乳首を責めることすらせずに、美しき清楚な人妻を啼かせたのだ。

「おやおや、まだマッサージは始まったばかりですよ、アイシャ様。それなのにずいぶん汗びっしょりです

ね。そんなにお暑いですか？」

「うう……」

あっさりと覚悟を打ち砕かれた悔しさと一気に上昇させられた快感の波に、アイシャの瞳に涙が浮かぶ。

荒い呼吸に合わせて胸が大きく上下し、娘を産むたびに豊かになった乳房がスリップの下で柔らかく揺れる。

（ダメ、透けちゃう。汗で胸の先端が透けて見えてしまうわ）

スリップの頂点にはもうはっきりと、誤魔化しようがないほどに突起した乳首が浮き上がっていた。汗で濡れた薄い生地越しに、やや濃いめのピンクが透けて見える。

自身の肉体の浅ましさを咄嗟に手で隠そうとするが、ギユネイはそれを許してはくれない。

「施術の邪魔になりますから、手は身体の脇か頭の上にどけておいてください」

魔術師とは思えないほど鍛え上げられたギユネイの手が、アイシャの腕を無慈悲に胸からどかす。

痛みを覚えるくらいの握力に、ギユネイへの恐怖がアイシャの中に生じる。夫から一度も乱暴に扱われた経験がないから余計だった。

「も、もうやめてちょうだい」

「なにをおっしゃいます。乳房は女性にとって象徴的な場所です。特に王妃のようにお子様を、それを二人も産まれた方はどうしてもその形が崩れがちです。しかもあなたはこれとおりの豊かなサイズですから、こは念入りに、みっちり処置をしませんと」

恥辱に長い耳が真っ赤に染まった。

密かに気にしていたことをずけずけと指摘され、揶揄されたことが恥ずかしくて悔しくて、アイシャはまた新たな涙を浮かべてしまう。

元々アイシャのバストはエルフ族としては珍しいくらいに豊かだった。しかしそのツンと上向いた形は我慢でもあり誇りだったのだ。

結婚し、二人の娘を出産したことでサイズはさらに増したが、そのせいでいくらかトップの位置が下がったのも事実だ。

乳首の色も濃くなり、乳輪も肥大した。張りがややなくなり、乳房全体が柔らかくなっているのも感じる。女として下り坂になってしまったせいで夫が自分を求めなくなったのかと疑心暗鬼になったからこそ、アイシャはどこか胡散臭いと思っていた人間の美容マッサージを受けたのである。

（く、悔しい……あの人と娘たちにしか触らせてない乳房をこんな輩に蹂躪されるなんて……しかも女の大

切な膨らみをからかわれるだなんて……っ)

だが、アイシャを最も苦しませているのは、そんな憎むべき男の手に触れられるたびに己の乳房が疼き、先端突起がじんじんと痺れ、下腹部が急激に熱を帯びていくという恥ずべき現実だった。

「私の調合した薬には、身体の細胞を若返らせる効果があります。王妃の乳房も私のマッサージを受け続ければすぐにかつての張りや形を取り戻せますよ」

「アアアッ！」

再びギュネイの魔手がアイシャの乳房を襲った。今度は撫でるのではなく、完全に揉まれてしまった。

夫とはまるで違う、短く、節くれ立った太い指がスリップ越しに人妻の豊乳を鷲掴みにし、柔肉が大きく歪むほど強く、荒々しく揉んでくる。

「ひうっ、ひっ、イヤ、やめて……やめなさい……ああっ……やめ、やめて……」

左右の乳が交互に、リズミカルに揉まれる。

芯までほぐすような強烈な愛撫に軽い痛みを覚えるが、そんなものは気にならなくなるくらいの愉悦が胸を中心に全身に広がっていく。

(嘘、嘘よ、私、どうしてこんなに感じてるの。ただ胸を揉まれてるだけなのに。あの人とは違うのに、乱暴にされてるだけなのにっ)

レオンの慈しむようなタッチしか知らない人妻にとって、ギユネイの愛撫の巧みさはすぐには理解できなかった。

ギユネイはただがさつに揉んでいるのではなく、アイシャの反応を冷徹に観察しつつ、適切な力とリズムでもって的確に性感を高めてきてるのだ。

しかもアイシャの身体にはすでに大量の魔法薬が浸透し、望まぬ発情状態にされている。この状況で次々と押し寄せる愉悦に耐えるにはアイシャは女として成熟しすぎていたし、夫が与えてくれた悦びはあまりに脆弱すぎた。

「どうですか王妃、私のマッサージは。いいのですよ、たいていの女性はまずこのバストマッサージで最初の頂点を迎えます、あなたも遠慮なく果ててください」
「誰が、誰があなたのような男の前で……アアッ、アッ、アッ、アアアアッ！」

王妃としての矜持がそんなセリフを吐かせたが、ギユネイの乳愛撫は容赦なくその強さと激しさを増し、アイシャの眠っていた牝を目覚めさせる。

指が埋まるくらいに柔らかい乳肉がギユネイの握力に屈して淫らに変形する。

乳輪ごと勃起させられた先端突起も手のひらでこね回される。

（ダメ、これ凄い、胸が、お乳が熱いの、じんじんしちゃうのお！）

アイシャはまだ気づいてなかったが、美妻の腰はさつきから浮き上がり、卑猥な動きを見せていた。ショーツの底部分には楕円形の濡れ染みがくっきりと確認できる。あまりに大量の愛液のせいで、銀色のアンダーヘアやサーモンピンクの縦割れすら透けて見えていた。

（なんで、どうして……胸だけなのに、下着の上からなの……アアッ、これダメ、あの人以外に恥を晒すなんて絶対にイヤ……堪えて、堪えて私のお乳……！！）

アイシャは両手でシートを掴み、歯を食いしばり、懸命に襲いかかる肉悦に抗った。

しかしとくに全身に回った強力な魔法薬の催淫効果と、ギユネイの巧みすぎる愛撫の前では、最初から結果は見えていた。そもそもこの戦いに勝ちなど存在しないのだ。

「あっ、あっ、イヤ……イヤ……おっぱいダメ……うああっ、ああ……っ」

悔しさと恥ずかしさにアイシャは顔を左右に振りながら泣く。

「では、そろそろフィニッシュにしましょう」

このままでも恥辱の乳アクメに達する王妃に対し、ギュネイは残忍な笑みを浮かべつつアイシャの胸の先端をつまんだ。

限界まで硬くさせられた左右の乳首をいきなり捻り上げられた可憐な人妻にこの鮮烈な悦楽を堪えることなどできるはずもなく、アイシャは生まれて初めて夫以外の男の前で痴態を晒した。

「ヒイイイッ！ やっ、あっ、乳首、イヤ、あっ、乳首ダメええっ！」

腰をかくかくと浮き上がらせ、ショーツに大量の絶頂汁を染み込ませながら、アイシャは胸の先端から次々と押し寄せる快楽にあられない声を漏らし続けた。

一度達した女体がどれほど脆いかを、アイシャは己の身を以て思い知ることとなった。

心はまだぎりぎり踏みとどまっている。王妃としてのプライドと、妻としての貞節さと、母としての責任とがかりうじて堕ちつつある肉体を支えていた。

（国民に、あの人に、娘たちのために耐えてちょうだい、私の身体っ）

けれど、一人の女としてのアイシャは、もう限界を迎えていた。それだけギュネイの魔法薬とマッサージ

は強力かつ巧妙だったのだ。

乳首はランジェリーの上からでもはっきりわかるほどに隆起していたし、ラブジュースでぐちょぐちょに濡れたショーツは女性器をまったく隠せていない。

きめ細かい肌は汗で艶めかしく濡れ光り、腰が勝手にくねるのを止められない。

「いい調子ですよ。体液を大量に分泌することで老廃物が排出され、新陳代謝が促されます。また、血行がよくなれば身体の隅々にまで栄養が行き届きます」

「やめ……もう、触らない、で……ああ……あうう……！」

乳房でオルガスムスを極めさせたあともギュネイの手は休まずにアイシャの全身を這い回った。

一度達したことでより過敏になった乳房はもちろん、二の腕の内側や腋窩、脇腹、内腿など、女の弱い箇所を次々と責めてくるのだ。

（声、勝手に出ちゃう……気持ちよくなんかなりたくないのに……あなた、助けてください、私、このままだと負けてしまいます……あの娘たちの母親でいられなくなってしまう……！）

ギュネイはたっぷり時間をかけて王妃を墮とすつもりらしく、決して焦る様子は見せなかった。しかし責めを緩めるつもりもないようで、新たなローションを

追加して紅潮した王妃の肌にねちっこいタッチで塗り込んでくる。

「さすがは一国の王妃、粘りますね。正直言います、ここまで粘った女性はあなたが初めてです、アイシャ様」

手入れの行き届いた腋の下に執拗にローションを塗布しつつ、卑劣な魔術師が笑う。

「くっ……そこはおやめなさい……ああ、イヤ……腋は……腋はダメなの……お」

（この男、やはり私以外の女性にもこのようなひどい仕打ちをしてるのね。なんて最低な……!）

「ああ、いいですね、その目つき、実にいいです。あなたのような美しい女性にゴミを見るような目で睨まれるのはたまらない」

「へ、変態……ッ」

「はい、もちろん自覚しておりますよ王妃様。ですから、もっと罵ってもらえると嬉しいです。もちろん、そのお返しにあなたにはもっと素晴らしい肉の悦びをプレゼントいたしましょう」

「あううッ!」

腋窩を舐っていた手が、いきなりアイシャの腹部に触れてきた。へその辺りに手のひらを置き、ぐっ、ぐっと軽く押圧される。

「なるほど、いい反応です。これならいきなりでもイ
けるでしょう」

「なにをしたのです、ギュネイ……アアッ！」

全身汗まみれの熟れた女体がベッドの上で大きく跳
ねた。身体の深い部分から、今まで感じたことのない
ような甘い悦びが広がったのだ。

（今のはなに？ 私の身体、どうしてしまったの？）

ギュネイはただアイシャの腹を軽く押しただけのほ
ずだ。それなのにアイシャはまるで軽いオルガスムス
を迎えたときのような鮮烈な快感を得ていた。

「おや、王妃様はこれの悦びをまだ未経験でした
か？」

「なんなのです、ギュネイ。あなたは私の身体になに
を……あはァ！」

またもエルフの女体が震えた。

（も、もしかしてこれは）

「これだけ繰り返せばもうおわかりでしょう。ええ、
私が今刺激してるのはあなたの子宮です。こうして子
宮の上から押圧し、魔力のバイブレーションを直接女
の急所に加えてるのですよ」

酷薄な笑みを浮かべたままギュネイは何度も手を揺
らし、出産経験のある子宮を蹴ってくる。

「ハアアアッ！ アッ、アッ、それダメ、揺らさない

で……ヒッ！」

ギュネイの狙いが子宮だと知ったことで、アイシャ自身の意識もそこに向けられる。そのせいで余計に女性の中心部に加えられる刺激に強く反応してしまう。

（こんなの、こんなのって……ひどいわ、赤ちゃんを育むための場所まで使って女を辱めるだなんて……アッ、だけど、だけどこれ、凄いの……今までこんな快感、知らなかったのお！）

「これは誰にでも通用するマッサージではないのですよ、王妃。個人差もありますから。しかし、あなたのように出産経験のある女性であればこの子宮美容法が適合する確率はぐっと上昇します」

この後に及んでもまだギュネイはこれが美容術だと言いつ張る。その冷静さと残酷さがたまらなく憎らしいが、今のアイシャにはなにもできない。まさに絶望的な状況だった。

「もちろん経産婦でなくともポルチオマッサージが適合する方もおります。恋人や夫に膣内から子宮を愛してもらった経験がある女性はその傾向が強いですね」

右手で子宮を、左手で乳房を遊びながらギュネイが淡々と話し続ける。

（子宮……そういえばあの人の長いのが一番奥に当たったとき、これに似た感覚が走ったような気がする

わ)

夫との甘い行為を思い出したことで、逆に今の状況との落差に絶望が深まる。

「残念ながら私のペニスはエルフ族の男性と比べると短いため、なかなか亀頭で子宮口をほぐすという手段が使えません。そのために覚えたのがこの技なのです」

(確かにこの男は人間族としても背は高くないわ。そうなると、やはりあっちの大きさも……)

もしも男性器のサイズが身長に比例するのなら、ギユネイのそれはレオンよりもずっと短いはずだ。

それに思い至った途端、アイシャは初めて心に余裕が生まれた。目の前の男のイチモツは所詮、愛する夫よりもずっと貧弱なのだと。

しかしアイシャは忘れていた。確かにギユネイの身長はレオンに比べて相当に低い。だが、横幅やその隆々たる筋肉の量はギユネイのほうが明らかに多いという事実を。

「貧弱な身体を披露するのは気が進みませんが、王妃だけ肌を晒しておいて私が服を着ているというのも不公平ですからね」

そんなアイシャの動揺をより大きくするかのように、ギユネイはいきなり服を脱ぎ始めた。下着もあっさり

と脱ぎ捨て、躊躇なく全裸となる。

「だ、誰があなたのような者の肌など……え？」

顔を横に背けたアイシャだったが、視界の端に捉えたそれに慌てて視線をギユネイの下腹部へと向ける。

（な、なんなのアレは!?)

全裸になった魔術師の股間に生えた怒張は、アイシヤの知る男根とは似て非なる形状をしていた。

（全然違う……レオンのと形が全然……っ）

アイシヤのグリーンの瞳は初めて見る夫以外の肉棒に釘付けとなっていた。

ギユネイのペニスは、確かにレオンと比べると短い。

だが、太さが違った。角度が違った。色も、形状も違った。

（どうして、どうしてあんなに天を向いているの？

なぜ真ん中からあんなに反り返っているの？ 色も黒

いし、先端がまるで矢尻のように大きいわ……!）

ギユネイのそれと比較すると、レオンのペニスはただ細長いだけのように思われた。

（なにを考えてるの、私はっ）

知らず口内に溢れてた唾を慌てて嚥下するが、先ほどまで嬲られていた子宮が勝手に疼き出すのが止めら

れない。腰が勝手にくねり、シーツの上に大きな皺が寄る。

「このような粗末なモノをお見せするのは気が引けるのですが」

そう言いつつもギュネイは股間を隠そうとはせず、逆に腰を突き出してその隆々たる男の、牡の象徴を王妃に見せつけてくる。

はしたないとは思いつつもアイシャの視線は憎らしい男のそれから逸らせない。びくびくと震え、太い血管を巻きつかせた極太の肉槍から目が動かないのだ。また、ギュネイの肉体そのものにもアイシャは驚かされた。

確かに身長は低い。エルフ族と比べてはもちろんのこと、アイシャの知る人間族の男の平均よりも頭一つは低いように思えるのに、太い筋肉の束で覆われた身体はまるでドワーフを彷彿とさせた。

（レオンとまったく違うわ）

無意識のうちに二人の牡の違いを探していたアイシャは、何度も生唾を呑み込んだ。

エルフは男でも体毛が薄いのに対し、ギュネイは胸や股間、腕や脚にも黒々としたものが密集している。エルフの美的感覚からするとあまり好ましいはずはないのに、なぜか先ほどまで嬲られていた子宮がじんじ

んと疼く。

「レオン王のようなスマートでしなやかな身体と比較されるのは恥ずかしいですね」

心にもないセリフを吐きながらギュネイがアイシャに近づき、マッサージという名の愛撫を再開する。

「やめて……お願いよギュネイ、これ以上は……アアッ」

またも子宮を揺らそうとする魔術師を払おうとする手も、抗いの言葉も、自分で驚くくらいに弱々しかった。

心より先に女の身体が敗北しかかっていることにアイシャは戦慄した。このままでは己が憎むべき卑劣な男に負けてしまう、愛する夫や娘たちに顔向けできなくなるかと怖れたのだ。

（負けてはダメ、私は王妃よ、妻よ、母親なのよっ）
理性をかき集め、下腹部に置かれたギュネイの手を払い除ける。

「ほお」

そんなアイシャの反応にギュネイは一瞬驚いたような表情を、そしてすぐに残忍な笑みを浮かべた。黒い瞳にサディスティックな光が宿ったのをアイシャは見失ってしまう。

「子宮を責められてもまだそんな抵抗ができるとは驚

きです。これは、私も本気で施術しなければなりませんね」

「も、もうおやめなさいギュネイ、今ならまだ引き返せます」

「無理ですね。私はもちろん、王妃、あなたもです」

口元を歪めて笑うギュネイの手がまたも下腹、すなわち子宮の真上を狙う。アイシャも抗うが、本気になったギュネイの太い腕に対してはなんの役にも立たなかった。

「ああああっ！」

先ほどよりも明らかに強い魔力の波が二度の出産を経験した子宮を揺さぶる。そしてエルフの王妃の意識が子宮に集中したその隙を見逃さず、反対側の手がついに秘所へと襲いかかった。

「そこは……ああっ、約束が違うわよギュネイ、そこは、そこだけは……ヒイツ」

大量の愛蜜を吸ったショーツは股間を隠すという役目はすでに果たせてなかったものの、それでも女の最も大切な場所を夫ではない男に触られるのは許せなかった。許してはならなかった。

懸命にこの非道な男を押し退けようとするも、子宮愛撫ですっかり力を奪われた下半身は抵抗らしい抵抗ができない。逆に、腰をくねらせて男を誘惑するよう

な淫らな動きになってしまふ。

「これもマッサージですよ、王妃。こうして身体の中の澱んだ毒を体液と一緒に排出する、一種のデトックスなのです」

勝ち誇った顔の魔術師は右手で子宮を、左手で媚唇を翳る。どうやら左手からも魔力を放っているらしく、シヨーツの上からの単純なタッチにもかかわらず、信じられないほどの快感が人妻の姫割れを包む。

（こ、こんなの知らないわ、レオンに触られたときも、自分で触ったときとも全然違う……卑怯だわ、こんなふうにな女の身体を辱めるなんてっ）

子宮と女陰という急所を責められたアイシャにもはや抗う術などなかった。

両手で枕を切なげに握り締め、大量の汗を浮かばせた女体を艶めかしくくねらせ、これまでの人生で最も強烈な悦びに切なげな声を漏らす。

大量の蜜を吸ったシヨーツはギュネイの指が蠢くたびにぐちゅぐちゅと聞くに堪えない卑猥な水音を立て、王妃の羞恥心を煽る。しかし無理矢理に火を点けられた女体はその羞じらいすらも肉悦へと変換してしまふのがたまらなく悲しい。

「イヤ……イヤ……もうイヤよお……ねえ、これ以上は本当にもう、もう……っ」

プライドを捨て、アイシャは涙声で人間の魔術師に許しを請う。だがギユネイは残忍な笑みを崩さずに憐れな王妃を嬲り続ける。

執拗に魔力の波に晒され続けた子宮は完全に蕩け、今まで経験したことのないような深い愉悦を経産婦の肉体に与える。

そして包皮を押し退けるほどに勃起したクリトリスをショーツの上からこね回され、男を欲して浅ましくひくつく膣穴を指でまさぐられては、アイシャに残された道は恥辱にまみれた絶頂を迎えるほかになかった。「ひうっ……ひっ……ひいいい……ッ」

必死に声を堪える。涙を流しながら耐える。唇を噛んで声を押し殺す。

果てたことを決して口にはしない。甘い声は漏らさない。

それはこの状態に陥れられた女にとって呼吸を止めるに等しい苦行ではあったが、アイシャは戦い続けた。(力を貸してあなた……私にこの悪魔を打ち払う力を……!)

愛しい夫と娘たちの顔を脳裏に浮かべて、己の肉を支配せんとする甘すぎる悦楽に立ち向かう。しかし、その抵抗も永遠には続かない。

「あううっ！ それイヤ、イヤーッ!!」

子宮だけでなく卵管や卵巣を魔力で震わされ、

「お願い、これ以上は無理、無理だから……あひいっ!!」

忘れた頃合いで勃起しきった左右の乳首を捻り上げられ、

「ああおっ、しょれ、やら……やなのおお！　ンオオオオッ！」

ショーツの布ごと膣穴に指をねじ込まれては、オルガスムスは不可避だった。

エルフ王国の清廉なイメージを諸国にアピールし続けてきた美しき王妃は涎を垂らしながらベッドの上で身悶え、夫ではない人間の男の前で何度も絶頂顔を晒した。

（また来る、またイク……イキたくないのに、こんなイヤなのに……っ）

薬と魔力という卑怯な手段で連続アクメに押し上げられたアイシャは、ついにその強靱な理性を打ち碎かれた。

「イ、イク、イクわ、ああ、またイク……ダメ、飛ぶの、私、飛んじゃうのお……んひいいい……っ……!!」

初めて自分から絶頂を告げると、アイシャは憎むべき魔術師に差し出すように腰を浮き上がらせ、深い女

の愉悦を極めた。

（逃げないと……今逃げないと、もう取り返しがつかなくなるわ）

わずかに生き延びた理性がアイシャに最後の警告をするが、身体が言うことを聞かない。夫が与えてくれたことのない快楽の余波はまだ色濃く全身にこびりつき、自由が利かない。

（これ以上家族を、民を裏切れないわ。ここが最後のチャンスなの……っ）

しかしアイシャを阻んでいるのはアイシャ自身でもあった。

確かにアイシャの良心や理性は国賊であるギユネイからの逃亡を命じている。が、生まれて初めて知った、知ってしまった本当の女の悦びのその先を求める自分が確かに存在するのだ。

（もしもあれで……レオンのよりもずっと太くて逞しいあれで貫かれたら、今よりもっと深い悦びが得られるのかしら）

無論、そんな思考はすぐに頭を振って打ち払うが、一度でも意識してしまったことは容易には消え去らない。そもそも、王妃の女体は意志とは無関係にとっく

に堕ちかけているのだ。

スリップ越しでもわかるほどに乳首も、乳輪も盛り上がっている。

散々嬲られた子宮はまるで出産直前のときのように重く感じられる。

そしていまだ直接接触られてないクレヴァスからは失禁したように大量の愛液が溢れ出し、シーツの染みの面積を拡大させていた。

「どうですか王妃、私の特別な美容メニューは。だいぶ毒が排出できたはずですが？」

「あ、あなたが……あなたが一番の毒だわ」

「おやおや、この後に及んでもまだそのようなことが言えますか。さすがは王妃、このギュネイ、心から感服いたします」

セリフの字面だけ見れば揶揄してるようだが、ギュネイは本当に驚いた顔をした。しかし、これがアイシヤの最後の抵抗だとも見抜いているのだろう、その表情は憎らしいくらいに余裕たっぷりだ。

「さてアイシヤ様、以上が私の美容プログラムです。ここで終わりにいたしますか？」

「え……っ」

驚きと安堵と失望とが一斉にアイシヤの心を掻き乱した。だが、どの感情が最も大きいかは考えるまでも

なかった。考えるよりも先に、疼く肉体が反応していたのだ。

屈辱と期待に全身を桃色に染めながら、半裸の王妃は自ら股を開いた。目を瞑り、顔を横に背けたまま、この嫌悪すべき男に脚を左右に広げたのだ。

「おや、それはどういう意味ですか、王妃」

（こ、ここまで来てまだ私を辱めるつもりなの、この男は……）

最後に残された意地で、アイシャは顔を背けたまま言い放つ。

「ど、どうせあなたもここで終わらせる気なんてないのでしょ？」

「いえいえ、言ったとおり、私の施術はここまでです。もちろん、王妃が延長を望むのでしたらオプションサービスとして承りますが？」

完全に勝利を確信した男が、まったく衰える気配のないペニスをアイシャの腹部に擦りつけてきた。荒い呼吸に合わせて激しく上下する腹を、熱くて硬くて禍々しい勃起がぐいぐいと押し込んでくる。

（か、硬い……あの人と全然違う……本当に同じオチン×ンなの？ 人間って、みんなこんなに凄いの……？）

この短時間ですっかり躰けられた子宮が疼き、新た

な愛液が割れ目から染み出る。

「さあ、いかがなさいますか王妃様？」

「ああっ、あなたは卑劣な男だわ」

「承知しております」

「地獄に堕ちなさい、人間の魔術師よ」

「すでにその覚悟は決めております」

絶望と怒りと恥辱に涙で枕を濡らしながら、アイシヤは言っではならないセリフを口にした。

「続きを……続きをしてちょうだい……ああっ」

口にしてから猛烈な後悔に襲われ涙が溢れてきたが、それ以上の興奮にアイシヤはぶるりとその半裸身を震わせた。

ショーツを脱がされる際、アイシヤは抵抗を見せるどころか、自分から腰を浮かしてギュネイを手助けした。無意識のうちにしてしまった自分の行動が意味するところを知り、アイシヤはまたも悲しみの涙を流す。
(私、私……なんてはしたない女なのかしら。でも、でももう堪えられないの、私も必死に戦ったの……！)

国のために先頭に立って出陣した夫や、大使として近隣諸国を回ったり、将来に備えて学んでいる娘たち

に胸の中で必死に謝りながら、アイシャは泣いた。泣きながら、人間の男に股を開いた。

「ああ……」

絶望に嗚咽するアイシャの股ぐらにギュネイの遠慮ない視線が注がれる。

「ほお。これがエルフの宝と称されたアイシャ様のマ×コですか」

「ひっ」

生まれて初めてぶつけられた卑猥な単語にびくりと肩が震える。

「エルフ族は体毛が薄いはずですが、さすがは二人の娘を産んだ王妃、こちらの毛はなかなかのものです
ね」

「い、いちいち口にするのはおやめなさいっ」

「いえいえ、毛の処理も美容には重要なのですよ？

見たところ、王妃の下の毛はやや濃いめですが、ご要望とあらば永久脱毛も可能です。いかがなさいますか？」

「や、やめてっ、そんなことをしたらあの人に……っ」

「なるほどなるほど。確かに男の中には女性の毛に興奮する者も少なくないですからね。実は私もそのクチ
でして」

「ひい!？」

いきなり秘毛を撫でられた。髪と同じ鮮やかな銀色に輝く柔らかいヘアをギュネイは愛おしむように撫で、つまみ、その感触を味わっている。

（嘘、そんなところの毛をいじられるなんて初めて：

…ああ、恥ずかしいわ）

羞恥の裏で、今まで経験したことのない不思議な興奮が高まってくる。

「ふむ、下の唇は思っていたよりもずっと可憐ですね。とてもここから二人の娘を産んだとは信じられませんが」

「ああっ、イヤァ！」

ギュネイの視線がどこに向けられているのかわかり、咄嗟に両手で股間を隠そうとしたが、もちろんすぐに払われてしまう。

「陰核はまあまあ大きさですが、今は完全勃起して包皮から露出していますね。大陰唇はぼってりしていますけど、平均サイズです。小陰唇は……ああ、色素の沈着もほとんどなく、綺麗なものです」

「ひっ……ダメ……そんなふうに見察したらダメえ……っ、つまむのはもっとダメ……ああ……ン」

股のあいだに身体を割り込ませてきたギュネイは王妃の秘所に顔を近づけ、女の最も隠すべき場所を至近

距離で視姦してくる。視るだけでなく指で花卉をつまみ、広げ、そして鼻を鳴らして匂いまで嗅がれてしまう。

（ひどい……こんな恥ずかしいことされるなんて……）

羞恥でどうにかなってしまいそうなのに、アイシャの花園からは次々と白濁した蜜が温泉のように湧出してくる。

「このままじっくりと触診するというサービスもありますが、王妃ももう限界のようですから、そろそろ仕上げに入らせていただきます」

股間から顔を上げたギュネイが、その股間から生えたおぞましい屹立をアイシャの蜜穴へと向けた。夫のモノとは比べものにならないほど膨らんだ先端部分からはだらだらと先走り汁が溢れている。

（あれは射精したのではない、のよね。する前からあんなに溢れてるのなら、発射したらどれだけの量が出るのかしら）

夫の精液量に匹敵するほどのカウパーに、アイシャは思わず生唾を呑み込む。

「ほ、本当に挿れるの？ 無理よ、そんなに太いのなんて」

「おや、それはつまり、レオン王のペニス私のこれ

よりも小さいということですか？」

「そ、そうは……ああっ！」

夫の名誉のために言い淀んだ隙に、亀頭が秘口にあてがわれた。粘膜同士の接触に全身が総毛立ち、女体は勝手に愛液をこぼす。

「大丈夫ですよ、これだけほぐれていますし、そもそも子供を産んだご経験があるのですから」

ギュネイの小柄ながら逞しい体躯がのしかかってくる。

先端が女肉を押し割って侵入してくる感触に、アイシャの貞節な妻の、母の意識が最後の抵抗を見せた。

「ダメ、やっぱりダメ！ やめて、お願い、やっぱりこれ以上はいけないの……ああっ、挿れないで、もう許してギュネイ……アアア！」

両手でギュネイの厚い胸板を押し返そうとする。しかしそんな抵抗は牡の加虐欲を刺激するばかりで完全に逆効果だった。

さらに硬度と体積と熱量を増した怒張は容赦なくエルフ王妃のクレヴァスを割り、夫しか知らない肉穴に侵入してくる。

「ヒッ……太い……太すぎる……ウ！」

夫のモノとは太さも硬さも熱さもまるで別物だった。牝を穿つための形状の亀頭が濡れた襞を搔き分け、

アイシャの貞節を犯す。

（入ってくる、あの人以外のが、人間のが私の大切なところに……!）

丸太を突き込まれたような息苦しさで圧迫感に女体が大きく仰け反る。レオンのサイズとは違うせいで挿入当初は軽い痛みが走ったが、それはすぐに霧散した。「あううう……ううう……あは……あああ」

アイシャにしてみれば、あるいは痛みが残ったままのほうがよかったかもしれない。その痛みに縋ることで背徳に流されるのを防げたかもしれないからだ。

しかし子宮まで蕩かされていた経産婦の肉体にとつて、ギュネイの勃起はまさに待ち焦がれた一撃だった。「いい感じにほぐれてますから、このまま一気に奥まで挿れましょう」

極太の鈴口を蜜壺に挿れ終えたギュネイはにたりと笑うと、アイシャの太腿を抱き抱え、そのまま一突きで膣を征服した。

「ンアアアアッ!!」

股間から脳天まで串刺しにされたかと本気で脅えたほどの強烈すぎる突きに、アイシャは啼いた。

細長いだけのレオンの分身では味わえなかった、膣道を満たす悦び、そして子宮を縦に揺さぶられる快感に、アイシャは絶頂してしまう。

（こんなの……ひどい……挿れられただけで果てるなんて……ああ、なんて太いの、遅しいの、これえ）

凌辱された悲しさはある。だが、それ以上の牝悦があるのがたまらなく悔しい。こんな卑怯な手で犯されてるというのに感じてしまう女の性が恨めしい。

「素晴らしいマン肉ですよ王妃。これは……ああ、極上の牝穴だ」

腰を突き出した格好のまま、ギュネイがどこか感極まった表情でそう言った。声が震えているのは、本気でアイシャの女肉に感動したためのようだ。

これまでほとんど生の感情を表に出さなかった魔術師の素の反応に、アイシャは不覚にも喜んでしまう。純潔を捧げたときに見せたレオンの感動した表情がふと思い出され、改めて夫を裏切った後ろめたさに涙が滲む。

「わかりますか、アイシャ様の襜の一枚一枚が私のチ×ポに絡みつき、吸いついてるのが。子宮が下り、私の亀頭にキスをしてるのがあなたにもはっきり感じられるはずです」

「そ、そんなのわかるはずが……ああっ、やめなさい、腰を、腰を揺すらないで、私のあそこを拡げないで、奥をいじめないでえ……ああん」

軽く腰をくねらされただけなのに、アイシャは早く

も媚びるような声を上げていた。己の女体がとくにギュネイに陥落させられていたことを改めて思い知らされる。

（でも、身体だけよ、心は、あの人への想いは絶対に変わらないわっ）

この身が女であることを呪いながらも、貞節なエルフの王妃は気丈に夫への想いを貫こうと目を閉じる。だがアイシヤは、その抵抗が男の欲望に火を点ける行為だと知らない。

「ほお、挿れられただけでイッたのに、まだ素直になりませんか。強情な方ですね」

その証拠にギュネイは目を細め、口角を持ち上げて冷酷に笑う。そして小刻みに腰を前後に振ってアイシヤから悲しみの声を搾り取ろうとする。

「あっ、あう、はううっ！ あっ、イヤよ、やめなさいギュネイ……んふううっ！」

ギュネイの腰使いは決して激しくはない。しかし的確に弱いところを擦ってくるピストンは、すでにこの時点で夫のそれよりも甘美な快感をもたらしていた。

（どうして、どうしてこんなに気持ちイイの、あの人じゃないのに、これはレオンのじゃないのに……い）

これが快楽であるのはもはや認めざるを得なかった。夫に抱かれるのと同じ、いや、それ以上の愉悦が己を

包んでいることを否定できない。

「少しずつ私の形に馴染んできてるのがおわかりですね？」

「し、知らない、知らないわっ」

「嘘はいけませんね、王妃様。あなたの下の口はもう自分から私のイチモツに吸いつき、新たな主人のためにその形を変えようとしているというのに」

「勝手なことを言わないでッ。誰が、誰があなたのような下劣な男に……あうッ！」

気高き王妃はそのグリーンの瞳で強姦魔を睨みつけたが、腰を強く押し込まれただけで反撃は封じられてしまう。つまりは、それほどにアイシャの肉体はこの人間の魔術師に屈服してしまっているのだ。

「ええ、確かに私は下劣な男です。だからこそあなたは私に逆らわないことをお勧めします」

腰を突き出し、亀頭で人妻の子宮口をぐりぐりと嬲りながらギュネイが淡々とした口調で続ける。

「なにしろ下劣ですからね、いつ、あなたの大切なレオン王を守護している魔法具の力を切るかわかりません」

「卑怯者……あなたは最低の卑怯者だわっ。女をこのような罠に嵌めて辱めるだなんて、あなたには良心と
いうものがないのですか!？」

「ありませんね。ですからお気をつけください、前にも忠告したように、私は王だけでなく、あなた方の大切な娘たちにも手を出すかもしれませんよ？」

「な……っ」

再度の脅迫に、全身の血の気が引く。夫だけでなく子供たちまで人質にされては、美しくも憐れな王妃に反撃の道はない。

「なに、ご安心ください、今のところ私が欲しているのはあなたです、アイシャ様。あなたがこうして私の慰み者でいてくれるあいだは、決して約束を違えません」

猫撫で声と、疼ききった子宮を優しくこね回す腰使いでアイシャを説得しようとしてくる。無論、こんなことでギュネイを信用できるはずなどなかったが、心よりも先に女体が承諾してしまった。

（悔しい……どうして私の身体はこんなにも弱いのか……？）

肉体と精神は不可分だ。身体が屈服すれば、心はどうしてもそれに引っ張られてしまう。

「ほ、本当ね、夫にも、娘たちにも手は出さないと約束するわね？」

念を押しながらもアイシャの腰は知らぬ間に円を描いていた。深々と膣奥まで貫かれた人妻の腰が、牡を

求めて淫らなサークリングを始めていたのだ。

「ええ、神に、そして私が心から崇拝するアイシャ様に誓って」

「し、白々しいことを……！　わ、わかった、わ。す、好きになさい。でも忘れないで、私は決してあなたのような男には屈しないと。いつかきっと、あなたをこの国から追放してみせます……アアアッ！」

エルフ王妃のセリフが途中で遮られたのは、ギユネイが本気の抽送を開始したせいだ。その頑強な身体を駆使してのパワフルなピストンに、アイシャはまたも望まぬアクメを迎えてしまう。

（イ、イッた、私、またイカされた……ああっ、やめて、止まって、イッたの、私、また果ててしまったのよ、お願い、少し休ませて！）

夫とは比べものにならない荒々しい腰使いの前に、アイシャはあまりにも無力だった。

普段のアイシャであればあるいはもう少し抵抗できたのかもしれないが、大量の魔法薬を塗り込まれ、子宮を揺さぶられ、強制的に発情させられてしまった女体では、最初から勝負は見えていたのだ。

「アアッ、当たる、当たるのよっ、硬いのが奥に当たってるのよおお！」

レオンよりも短いはずのペニスはその硬度でもって

人妻の最深部を叩き、

「ダメ、ダメダメ、広がっちゃう、私の、ダメになっちゃうからあ！」

極太の肉筒は容赦なくアイシャの膣道を拡張してく。

（こんなの知らない、あの人は教えてくれなかった……ああっ、助けてあなた、このままでは私、あなたのことを忘れてしまう、あなたを裏切ってしまう……！）

今は遠く離れた場所にいる愛しい夫に心の中で呼びかけるが、その幻影はなにも答えてはくれない。その代わりに、現在、目の前にいる男の実体ある熱い肉棒がアイシャの牝穴を埋め、穿ち、ほじってくる。

「ふふふ、だいぶ私のチ×ポに馴染んだそうですね。

襲もひくひくして、最高の感触です」

「言わないで……ああ、私、違うの……こんなの、私じゃないの……お」

アイシャの両目から涙がこぼれるが、それが悲しみによるものなのか、あるいは肉悦がもたらしたもののかは、もう当人にもわからなくなっていた。

「美しいですよ、アイシャ様。あなたは蕩け顔すらも美しい」

「ひっ……！！」

いつの間にかギュネイの顔がすぐ目の前にあった。
唇までも奪おうというのだろう。

アイシャは懸命に顔を背けて夫にしか許していない
唇を守ろうとした。

すでに何度もオルガスムスを極めさせられ、子宮口
に届くほど深々と犯されていても、唇だけは特別だっ
た。

（キスは、キスだけは絶対にダメ。あの人と永遠の愛
を誓い合った唇だけでも守らないと……！）

幸せの絶頂だった結婚式の誓いのキスを思い出して
しまい、現在の己との落差に絶望が深まる。

「ふむ、いいでしょう。では代わりに、私はこちらを
味わわせていただくとします」

「はひィ!? あっ、嘘……イヤ、そこはダメ、そこは
絶対にイヤ……アァーッ!!」

唇の貞操を守ったのも束の間、この卑劣な魔術師は
次なる獲物に襲いかかった。

（耳、耳い！ ダメ、耳は許して……舐めないで、噛
まないで……ッ！）

エルフ族の象徴であり誇りであり、そして弱点でも
ある長い耳を唇で挟まれた。舌で舐め回された。

「ひっ、ひっ、ひいやあああっ！ ああっ、らめっ、

耳は、お耳は絶対らめえっ！」

それまでどうにかぎりぎりで踏みとどまっていた一線を越えてしまったのが自分でもはつきりわかった。わかってしまった。

「ひゃうっ、あっ、しょこはイヤ、お耳はやめへっ…
…ひいイッ！」

そしてそれを見越していたようにギュネイはピストンの回転数を上げ、アイシャを完全に墮とそうとする。これまでの抽送はどこか探るようなところが感じられたが、今回は違っていた。一突き一突きに力があり、アイシャを、牝を屈服させようという意志が込められていた。

「あうっ、あうっ、はうううっ！ 深いよ、深すぎるのよお！ イヤ、もうやめて、これ以上私を穢さないで…あひいンンン!!」

耳を、噛まれた。同時に、乳房が変形するほど強く揉まれた。

「やらっ、お耳、お耳はイヤなのお！ ああっ、奥もりゃめ、そんなにごんごんしないれえ！」

敏感な耳を舐られ、乳首をつねられ、そして子宮を撈られる。

夫にしか許してなかった膣道をびっちりと埋め尽くす怒張に媚襞を抉られるたびに己の声が蕩けていくのがわかる。

レオンにも見せたことのない喘ぎ顔を至近距離で視
姦されたまま、アイシャは最後の飛翔に向けて昇り始
めていく。

（イキたくない、こんな男にイカされたくない……お
願い、堪えてちょう子宮……っ）

けれどその悲痛なまでの願いを打ち砕くセリフがギ
ュネイの口から放たれた。

「さあ、イキますよアイシャ様、私もそろそろ我慢の
限界です」

「それってまさか……アアッ！」

女を絶望に叩き落とす言葉に、アイシャは最後の力
を振り絞って抵抗した。抵抗したつもり、だった。

しかし悲しき王妃の女体はとくにこの魔術師の責
めに屈服していた。

意志とは裏腹に腰は勝手に浮き上がり、ラストスパ
ートに入ったギュネイに合わせて淫らなダンスを踊っ
てしまう。

無数の媚粘膜が蠢きながら人間の勃起に絡みつき、
大量の愛蜜を溢れさせてより深い愉悦を、熱い子種の
爆発をねだっている。

（やめて、やめてやめてやめてえっ！ イヤよ、こん
な男の子供なんて孕みたくない、ここは、私の子宮は
あの人のものなのお！）

勝手に降りて受精の準備を整えている己の子宮を呪いながら、アイシャは啼いた。絶望の裏側から生じる圧倒的な牝の肉の悦びに、屈服の、被虐の嬌声を上げてしまった。

「ダメ、もうダメえ！ 来る、来るのっ、しゅごいの来ちゃってるのよお！」

無意識に両脚がギュネイの胴に回される。腰が勝手にしゃくり上げる。

「イヤなのにイッちゃう、極めちゃううっ！ あひっ、イク、イクわ、悔しいけどイク……イグ……う……!!」



「ぐ……うっ！」

絶望と歓喜の中、アイシャとギユネイは同時に絶頂した。

「ああっ、またイク、人間の精子なんかでまたイッちやう……あなた、ごめんなさい……イクの、私、またイクの……お！」

頭と子宮を真っ白に染められながら、エルフの王妃は人生で最悪の、そして最高のアクメを迎えた。